

# 『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段についての私解

山田利博

前稿<sup>①</sup>でも書いたように、本学で『枕草子』の演習をしているせいで、専門でないにも拘わらず、近頃それについて気づくことが多い。今回取り上げようとしているのは、標題に謳ったように、「三条の宮におはしますころ」の段である。前回扱った、『枕草子』を代表するかのような「雪のいと高う降りたるを」段に比べれば、この章段は恐らく、専門家くらいしか知らないマイナーなものだと思いが、意外に大きな問題を孕むものである。試みに、今最も新しい『枕草子』のテキストである小学館・新編日本古典文学全集の当該段、全文は次節に掲げるが、その中に含まれる和歌についての頭注を一部抜粋して引用しよう。

一首の意はほぼつかめるものの、前の「青ざし」献上との関連は必ずしもはつきりしない<sup>②</sup>。

当該段全文を掲げていない今、この言葉の全ての意味を汲み取ることは不可能かもしれないが、要はここに、現在でも解けない謎が存在することが確認できれば良い。本稿はそれについての私解を提示し、大方の教示を受けようとするものである。

本稿の問題意識だけを簡潔に語ろうとした前節でも既に聊か問題となつたように、私解の当否を問うためには、どうしても当該本文の共有が必要である。幸い当該段は短小であるため、次にその全文を掲げよう。

三条の宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿など持てまゐり、薬玉まゐらせなどす。若き人々、御匣殿など、薬玉して姫宮、若宮につけたてまつらせたまふ。

いとをかしき薬玉ども、ほかよりまゐらせたるに、青ざしといふ物を持て来たるを、青き薄様を艶なる硯の蓋に敷きて、「これ、籬越しにさぶらふ」とて、まゐらせたれば、

皆人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける  
この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。

(下巻一〇〇頁。以下、『枕草子』の本文引用は、石田穰二訳注の角川文庫本による)

前稿でも問題にしたように、年時が確定しづらい『枕草子』の章段が多い中で、本段は例外的に、冒頭の「三条の宮」が当時の中宮大進・平生昌の邸であり、また、後に「姫宮」「若宮」と並べられ、定子に既に二人の子がいることも明らかである等の理由から、諸注皆、長保二年五月のこととして揺るぎがない。それ故本稿でもその前提に立って話を進めるが、周知の如くこの年は、道長の娘・彰子が入内し、定子はいっそう追いつめられていたことは、『栄花物語』巻第六かかやく藤壺<sup>③</sup>によつても窺える。

た、たこれも周知の如く、『栄花物語』は道長賛美のための書物であるから、敵方である定子について、どの程度客観的な描写がなされて

いるかは、新編日本古典文学全集『栄花物語』①の、引用文前半について注ではあるが、この辺り全体の記述に対する解説と思われる三一頁頭注九「これ後日なくなり給ふ前表也」（『栄花物語抄』）『栄花』中の重要人物は前もって死期を自覚することが多い」を待つまでもなく、疑わしい。だが、既にこれらの資料から知られる如く、この時定子は、三人目の子・嬖子内親王を身籠もっており、妊娠中の女性の心理を考慮すれば、一概に嘘とも言えない状態にある。

そのような中でこのやりとりは行われ、その何処に問題が存するかは既に前節に掲げたが、言うまでもなくこれは、かなり以前から指摘されているので幾つかの解がある。最近それは、枕草子研究会（雨海博洋・神作光一・下玉利百合子・中田武司・松田喜好）編『枕草子大辞典』（勉誠出版 平13）に、田畑千恵子氏の手により簡便に纏められたので、次にはそれを掲げてみよう。

（前略）「みな人の」の歌の解釈をめぐっては、二通りの説がある。

- ① 「すべての人が権勢に赴く花やかな節日の今日、あなただけさびしい私の心を知っているのですね。」（池田亀鑑・岸上慎二『日本古典文学大系』）など、彰子方の隆盛の陰で天皇と隔てられたつらい心境を述べたとする立場。
- ② 「香り高い麦秋の新麦をもって作った青刺しをいち早く献じた、型破りの贈物を愛でられての御歌」（塩田良平『枕草子評釈』）など、清少納言の機転や趣向を褒めたとする立場。

①は、古注以来、主流を占めて来た解釈だが、史実的背景をそのまま重ねて、事実を復元しようとする読み方は、一方では、枕草子という作品の表現の論理を無視したものにかならない。あえて言えば、現実の定子の心情がいかなるものであったかは

問題ではない。悲嘆を嘆いたものであってもかまわないのである。「みな人の」の歌を、枕草子が、いかなる歌として語ろうとしているかが、作品としての問題なのである。

この段の構成が、定子の歌を核とした、一種の歌語りとも言うべきものであることには異論がないだろう。だとすれば、詠歌の背景は、歌の直前までに語られているはずである。（中略）やはり、塩田説など②の解釈を支持したい。「青ざし」のもつ庶民的な目新しさが、個性的で新しい美を求める定子の美意識にかかった。その評価が即興の歌として清少納言に伝えられた、というのが、この段が語る詠歌の事情である。末尾の「めでたし」は、女房の機知に即座に応じ、趣向美を解する主君定子への賛嘆である。（四七〇～一頁）

この章段に存する問題点が全て盛り込まれた好論と思ひ、かなり長く引いてしまった。諒とせられたい。

私事を言わせていただければ、田畑氏は私の先輩に当たる人なので、疑義を挟むのは聊か気が引けるけれども、「青ざし」ほどの注釈書でも「青麦で作った菓子」とはあるが、これまた一様に「という」と付加されて、実体が必ずしも明きらかでないこともあり、それを献上することが果たして「庶民的な目新しさが、個性的で新しい美を求める定子の美意識にかなう」と言えるのか否かも未だ不明確だし、「史実的背景をそのまま重ね」る読み方も、必ずしも「枕草子という作品の表現の論理を無視したものにな」とは限らない。仮にそうした読み方をしたとしても、それが「作品の表現の論理」にかなっていれば、それに越したことはないはずである。実際にそうなっているかどうかは諸賢の御判断に委ねることにして、本稿が目指すところも正にそこなのだが、それについて述べるためにはさらに言葉を重ねなければならぬので、節を改めて詳述しよう。

## 二

同じ場で学んだ者として、田畑氏が何故このように言われたのかも大方察しがつくのだが、それを裏付けるように『枕草子大事典』の氏による解説は続いていく。それは、本段最末尾の語「めでたし」についてである。

定子贊美の評語としての「めでたし」は、中関白家盛時の章段には頻繁に用いられ、衣装・容姿・心ばえなど多方面にわたって、定子を贊美する代表的な評語である。ところが、没落後の記事には意外なほど少なく、この段を含めて四例のみ、全て、定子最晩年の長保元、二年を史実年時とする。生昌に対する寛容さに対するもの（六段④）の他、久々に入内が実現した長保元年正月の記事（八三段）、一条院今内裏での天皇とお揃いの姿（四七段後半部）など、中宮として本来あるべき姿で描かれる時に「めでたし」が用いられるのである。（四七一頁）

この引用文の最後二行あたりが、氏をして①の解釈を採ることを躊躇わせるものだと思うが、それは②を唱えた塩田良平氏も同様で、そもそも『枕草子評釈』（学生社 昭30）当該段の頭注8には次のようにある。

（前略）この年、道長の長女彰子（上東門院）中宮となり、日に増しときめいて、ひとびとがその方に離れていくことを、定子皇后は快快と楽しめなかつたのであると、加納諸平は説明しているが、「いとめでたし」の語が落ち着かない。これは香り高い麦秋の新麦をもつて作った青刺をいち早く献じた、型破りの贈物を愛でられての御歌と解したほうがよくはないか。

（原旧字体。五二七頁）

つまり②説は正にこの「めでたし」に対する違和感から生まれたことが分かるのだが、残念ながらこの説を採ろうとも、その違和感がす

つきり解消されるわけではないことは、最初の節にも掲げた如く、最新の注釈書にもあのように書かれているから、別に稿者だけの思い込みとも思えない。そして興味深いことに、この違和感は、①の解釈を採られる萩谷朴氏も同様に感じておられるらしい。

但し、第二百二十五段のしめくくりの評語が「いとめでたし」とあって「いとあはれなり」とないのは、執筆時の感情がまだそこまで高まつていないのと同時に、自分も思い及ばなかつた六帖の歌の真意の鮮やかな転用に、女人としての皇后への同情よりも、作家としての皇后への讃嘆が先に立ったからであろう。（中略）清少納言も第二百二十六段では「いとめでたし」と余裕を見せた筆致を、ここ（第二二六段のこと。引用者注）では「いみじうあはれなり」と甚だ切迫した表現に切り替えねばならなかつたのである⑤。

周知の如く萩谷氏は、三巻本のこの段から始まる四章段を纏めて「悲哀の文学」と捉えるので、特に中略以降のような書き方になるのだが、同じ雑纂本でも、能因本ではこれらの章段は必ずしも連続してこの順に並んでいないことは、氏自身も指摘されている⑥。しかし、三巻本至上主義者たる氏はそれを、「悲哀の文学として、晩年の皇后のご非運や中関白家の悲劇に対する鎮魂挽唱の章段を連ねた作者清少納言の意図を、全く粉砕してしまった心なきわざである」というの他はない⑦とされるのだが、一般的に言っても、三巻本と能因本、どちらが優位であるかは決着がついたとはとても言い難いし、特にこれらの章段については、萩谷氏と全く逆を説かれる藤本一恵氏の論⑧もあるからなおさらである。よって本稿は、萩谷氏が説かれたように、この章段は、一連の「悲哀」を語るその冒頭に位置するから、やはりその感情を表すのだとは短絡しないことにするが、前節で押さえた史実からすれば、少なくともこの段だけは、そう見ることが可能であ

ろうとは思ふ。そしてそれを色濃く読む萩谷氏でさえ、この「めでたし」に違和感を感じられたことだけは、重々押さえておきたいのである。

ここまで来ればこの章段の問題点は、正にこの「めでたし」に対する違和感に集約されるということが浮彫りになったと思うが、現在提出されている①、②いずれの解釈を採ろうとも、それがすっきりと解消し得るものでもないことも、また明らかになったと思われる。ではそれを解消する方法は無いのであろうか。私見ではそれは、この章段に含まれる和歌の解釈にあると思うので、節を改めて見てみよう。

## 三

前節に掲げた萩谷氏の解釈の中略以前にもあったように、この歌の直前にある清少納言の科白「これ、籬越しにさぶらふ」は、『万葉集』三一〇番歌「栴檀越尔(カキ(マセ)「ゴシニ」 麦昨駒乃(ムギハムコマノ) 雖貴(ノレドモ(ラルレド) 猶恋久(ナホゾコヒシク) 思不勝焉(オモヒカテヌヲ(タエヌカ) もしくは『古今六帖』一四二七番歌「ませごしにむぎはむこまのはるばるにおよばぬ恋もわれはするかな」(和歌の引用は新編国歌大観による)を踏まえるというのが少し前の説⑧であったようだが、定子に対して「雖貴ノレドモ(ラルレド)」というのは聊か抵抗があるのか、今日ではほぼ後者に統一されているようであるから、本稿でもそれに従う。それにより、「青ざし」が、わずか、或いは到来物であることを示すというのが、今日一般的な説のようであるが、それを萩谷氏はさらに深読みして、勿論、清少納言の意の存するところは十分御了解になったであろうが、何しろ神経が極めて先鋭化している時であるから、それ以上に「はつはつに及ばぬ恋」という第三・四句に気を廻されたのであろう。一条院新内裏と三条第と、遠く主上から隔てられている自が身を、柵越しに麦を喰もうと足掻きする駒のよ

うに、及ばぬ恋にもだえるものと、清少納言が同情したに違いないと考へ着かれたのではあるまいか⑨。

と見る。その後氏は、「今日のような節供の折には、さぞかし多勢の公卿殿上人が中宮彰子の周辺に集まって、蝶よ花よと持て囃しているであろうと考へて、一層みじめな気持ちに迫りこまれて、そんな自分の心中を見通しに知ってくれるのは、清少納言よ、そなただけだと、仰せられたのであろう」と続けられるので、先ほど述べた、章段末尾の「めでたし」との齟齬が生じてしまうのであるが、これは単に、歌中にある「君」の取り違えにすぎないのではなからうか。と言うのは、わざわざ古語辞典を引くまでもなく、「君」とは、「もと主君などの意であった(中略)臣(おみ)の対」(角川古語大辞典(CD-ROM版)だからである。つまりこの歌の「君」とは清少納言ではなく、主君でありかつ夫の一条天皇のことなのではないか。つまり、清少納言が本来籠める意図はなかつた意味まで定子が深読みしてしまったということころまでは萩谷氏の解釈と同じだが、それを定子は、「中宮彰子の身近にいる人は皆、今頃は彼女の機嫌を取ろうと躍起になっているだろうけれども、我が君(一条天皇)だけは、私の心を御理解下さっているだろう」と返し、いかにも中宮らしい毅然とした態度に清少納言は感動したのではないかということなのである。

ただ、この考への最大の障害となるのは、『枕草子』中にたった一例ではあるが、ことごとく和歌の中で、清少納言を定子が「君」と呼んでいる、「五月の御精進のほど」段の「元輔が後と言はるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる」(上巻一三六頁)であることは十分承知しているが、逆に清少納言が定子を指した例であり、しかも歌そのものは拳がついていないけれども、「清涼殿の丑寅の隅の」段の、「年降れば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし」を「君をし見れば」に書き換えたところある例(上巻三三三頁)を始めとして、派

生語も含めた残り二十九例<sup>(5)</sup>は、全て先ほど述べた「君」の概念で捉えられるものばかりであるから、この一例を以てこの説を無下に退けることはできないと考える。

以上、『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段の和歌の中にある「君」を、清少納言ではなく一条天皇と見る可能性について粗々論じてきた。大方の御叱正を願う次第である。

## 注

- (1) 拙稿『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」段の年次(『宮崎大学教育文化学部紀要』人文科学 第5号 平14・9)。以下前稿とはこれを指す。
- (2) 三五九頁頭注一一。
- (3) (帝ハ)よろづ心のどかに、宮(定子)に泣きみ笑ひみ、たゞ御命を知らせたまはぬよしを夜昼語らひきこえさせたまへど、宮例の御有様におはしますま、もの心細げにあはれなることどもをのみぞ申させたまふ。(引用は、小学館新編日本古典文学全集『榮花物語』①三二二頁) はかなく五月五日になりぬれば、(中略)皇后宮には、あさましきまでものみおぼえたまひければ、御おとこの四の御方(御匣殿をぞ、今宮(若宮)の御後見よく仕まつらせたまふべきやうに、うち泣きてぞのたまはせける。御匣殿も、「ゆゆしきことを」と聞えて、うち泣きつつぞ過ぐさせたまひける。(同三一六く七頁)
- (4) 『枕草子大事典』は、『枕草子研究会編『枕草子』(勉誠出版)をテキストに用いているので、章段番号は本稿のものと異なる。因みに角川文庫本での番号を掲げておけば、順に、五段、八三段、四六段となる。
- (5) 萩谷朴『悲哀の文学——枕草子の一面——』(『国語国文』 昭40・10)。
- (6) 萩谷朴『枕草子解環』四(同朋舎 昭58) 三九四頁。

(7)

藤本一恵「枕草子における和歌記載の一考察——定子鎮魂の章段をめぐる——」(『女子大國文』64号 昭47・1)。但し氏は、三巻本の章段配列も、能因本を元とした清少納言自身による「編成しなおし」と捉えられ、そういう意味ではこの配列に、萩谷氏に近いものを読み取っておられることになる。しかし、必ずしもそう読む必然性が無いことも、既に田畑千恵子氏が「枕草子」御乳母の大輔の命婦「の段の表現構造——末尾の一文と「あはれ」の位相をめぐって——」(『日本文学』平5・6)で述べられ、稿者もこれを妥当と考えるから、本稿ではそれに従う。

(8)

岩波書店の旧日本古典文学大系本はこの両首を掲げる。但し新では後者のみである。

(9)

榊原邦彦編『枕草子 本文及び総索引』(和泉書院索引叢書33 平6)による。

(二〇〇三年四月二十五日受理)